

高齢者大学

12月歌会

百歳を祝ぐとて賜ふ県知事の表彰の声やさし
さ満ちて 氏岡百枝
天高く湧く綿雲にあたらしき今日の光のおも
むろに満つ 岡本トシ
職を得し孫の大きな声響き電話の先に笑顔の
見ゆる 山城雅子
「正直は一生の宝」日めくりの今日の格言しみ
じみと読む 岩木タエ子
亡き母の逝きたる歳を今日越えて過ぎし日惚
ぶ冬の夜の部屋 荒木 幸
わが庭の数多生りたる八朔の黄色の玉実ぬく
もりありて 安東綾子
ひこばえは稲刈り跡の一面に冬日浴みつつ競
ひ伸びをり 宮本幸子
遠き日に芹を摘みしはこのあたりグリム童話
の様な家建つ 山田弘子
川浴ひに一処残れる竹群の切り払われし鷺の
埒も 雲田郁子
草もみじ彩へる野辺の風冷えて背押され帰る
夕映の途 山下菊代

万句の里俳句会

12月句会

一株の石路の花咲く古戦場 林 まつ子
金色の落葉に埋もれ神の庭 富田幸子
テニス果てコートに冬日残りたる 松永久子
寒鴉杜の静寂を鳴くばかり 中路郁子
親王も踏まれし落葉かと思ひ 鋤本トミ
大冬木走り根にあり底力 田中ひさ子
本城の風を揺らして笹子鳴く 東 鈴子
笹鳴くや鎮守の森の静寂より 稲田鈴子
のしかかる雪雲重き一日かな 光本とよいち
公園に色なき風や枯木立 小山照子
帰り咲く山植子に師を重ねをり 吉井綾子
遠目には光となりし鴨の水尾 丸山美代子

肥後狂句桜会

12月例会

OKよ キノコ博士が太鼓判 光堀善教
OKよ 此処から先は馴れた道 小川繁美
OKよ 絶対他言しないなら 高倉新米
女はこりごり 口止め料は無駄じゃった 狩野本六
こしゃくれ 親の躰がなつとらん 田尻浩風

泗水短歌会

12月詠草

健康の有無確かむと息子の電話歳重ねればし
みじみ感謝す 高藤タツノ
仰ぎ見る皇帝ダリアの初花を見せたい人に今
朝は供花とす 長尾はるみ
小春日の温もり留まる庭隅に日向ぼつこの定
位置のあり 中山定子
在りし日に夫と埋めたる銀杏の実三尺ほどに
伸びて秋呼ぶ 平嶋きくえ
山茶花のほろほろ零るる夕つ方蜘蛛余念なく
網を張りゆく 大島さと

せせらぎ俳句会

12月例会

若者の歌も時には聞きたしと字幕に頼りイヤ
ホーンに聞く 増田久美子
町川の岸边紅葉に染まり初む鴨等行き交う忙
しき朝 吉安永子
木戸口の楓に晩秋の陽は透きて湛へし血潮く
れないしづく 福原美智子
細目あげ秋日和に猫長くなるわれも眠たく本
をとじたり 矢野悦子

肥後狂句水笑会

12月例会

煤払ひに動き鳴り出す古時計 服部静子
着ぶくれて寝返りさえもできぬ孫 藤本アツ子
過ぎし日の句友偲びつ納め句座 寺本和子
半世紀の闇汁の夜々を偲ぶ夜半 村山数恵
ちゃんくわらで ちよいちよい飯の炊けとらん
井手水光
ちゃんくわらで 湯飲みの下に水たまり 宮上美由

七城短歌会

12月詠草

「持久走、頑張ったね」と寝る孫の頭撫でやる吾
ころ満つ 森 道子
柿の実は夕日に赤く輝きぬ獲る人無き世を我
にふりみる 高木 精
健康に自信持ちしも何時しかに膝の痛みに戸
惑うこの頃 池田カツ子
露とどむ白菜畑に蝶二匹しばしを止まり又飛
び移る 岩崎照代
秘境なるせんだん轟の滝に來し紅葉の錦去り
難くおり 緒方寛子

旭志文芸俳句会

12月詠草

遠く住む嫁の父より届きたる宅急便を受けて
抱くも 水田紗陽子
採血の尖りし針が腕に今刺さりくるなり総身
が縮む 佐々重弘
そよ風にコスモスの花揺るるなりまさに恥ら
う乙女の如く 岩津涼子
先がけの山茶花一輪見つけたり今日はよき事
あるとぞ思う 吉間充子
人の世の歳末忙しき知らぬ猫二匹が炬燵に出
入りが目立つ 齊藤芳子

